イスラーム陶器

日本ではイスラーム陶器の蒐集が充実しており、それらを鑑賞するのに便利な用語集を作成しました。最古のイスラーム陶器として知られるのは、９世紀にアッバース朝の一時的な首都であったサーマッラーから出土した陶器類ですが、その高度な技術からこれ以前にも何らかの前史があるのだろうと推測されています。陶器の名前の由来は、（１）陶器の特徴（例：ラスター）や製法（例：ミーナーイー）などと、（２）産地（例：サリー、イズニク）や出土地（例：クバチ）などの２つに大別されます。（K.S.）

	制作地	時代	彩画／色彩	特徴など
ラスター彩陶器 luster-painted ware　（あるいは lustre とも） Object NEP19. Courtesy of the Penn Museum. http://www.penn.museum/collections/object/185989	イラク	9 世紀頃	植物、抽象／多色	金属のような光沢が特徴的な焼き物。ラスター（luster）とは、「光沢」「輝き」を意味する英語。絵具中に酸化銀や酸化銅を用い、酸化還元反応を起こさせるため、二度の焼成が必要とされる[1]。これは「水に浮かべた油滴が広がって薄い皮膜となり虹色に見えるのと同じ原理」[2]によるもの。これにより、淡金色から深紅色が得られ、それが光の当たり具合によって変色現象を起こす[3]。イスラームでは金銀食器の生産が禁止され、その代用品として考案されたといわれる[4]。なお、金銀食器の利用禁止はイスラーム法の規定に基づくもの。
	エジプト	10 世紀末以降	動物、人物／単色（10 世紀以降）	
	スペイン、ラッカ（シリア）、カーシャーン（イラン）	12 世紀後半以降		

ブルー・アンド・ホワイト blue-and-white ware Bowl Emulating Chinese Stoneware http://www.metmuseum.org/collection/the-collection-online/search/451715 Blue and white Abbassid bowl from Basra Vessel Harvard Art Museums/Arthur M. Sackler Museum, Gift of Elizabeth S. Ettinghausen in memory of Richard Ettinghausen and in honor of Mary A. McWilliams, 2006.207 Department of Islamic & Later Indian Art, Division of Asian and Mediterranean Art http://www.harvardartmuseums.org/art/316050	イラク、その後イランへ	9 世紀頃	アラビア書道風文様／単色	白い地の上に藍色で図柄が描かれた陶磁器全般がブルー・アンド・ホワイトと英語で呼ばれ、中国の染付磁器も含まれる。白地藍彩ともいう。イスラーム陶器の場合は、中国白磁の模倣として始まった。粘土製胎土に不透明の白釉を分厚く施し，その上に藍色で着彩した。12 世紀以降は胎土の技術革新によって薄さと白さが改善した[5]。
	エジプト、アナトリア（トルコ）、イラン、シリア	14 世紀以降	中国風文様／単色	中国の青磁や染付(青花)の強い影響を受け、模倣品が生産された。

サリー陶器 Sarī ware Object 59-5-7. Courtesy of the Penn Museum. http://www.penn.museum/collections/object/255633	サリー（イラン）	10 世紀頃	中央にある様式化された大きな鳥／多色	鉛釉陶器。「白化粧土で覆われた濃褐色の素地の上に，赤茶，黄，黒などの化粧土 で彩色を施し，その上から薄い透明釉がかけられている」[6]。
胎土の技術革新	エジプトか	12 世紀頃		11 世紀までの胎土（陶器の素材）は粘土が主体であったのに対し、12 世紀頃に石英を多く含むフリット胎土と呼ばれる複合胎土（人工胎土）が完成した。これにより、白くてより硬質の陶器が製作されるようになる。当時イスラーム圏では中国の磁器が珍重され、その薄さと白さを模倣するために様々な工夫がなされた。11 世紀までは胎土の色を隠すために白い不透明釉をかけたり白化粧土をかけたりしていたものの磁器のような薄さは実現できなかった。12 世紀以降使われた複合胎土（人工胎土）によりかなり薄くて白い陶器が作られるようになった[7]。 ただし、分類上はやはり陶器にとどまり、「硬く、軽く、薄くたたけばチンチンと涼やかな音のする中国の磁器」[8]の特徴を兼ね備えることはなかった。なお、中国では染付に必要な酸化コバルトが不足したため、元代には「回青」と呼ばれるペルシア産のものが盛んに輸入された[9]。

ラカビー陶器 laqabi ware（lakabi とも） http://www.metmuseum.org/collection/the-collection-online/search/452936	イラン、シリア	12 世紀	動物や鳥／多色	「深い刻線で図柄が描かれ，多色釉で着彩された，12 世紀ペルシアの陶器をさす現代の俗称」。ラカビーとは“施釉の”を意味するペルシア語 lo‘ābī の転訛であるらしい[10]。様々な色の釉薬が混じり合わないように、各色の境界線が深い刻線あるいは盛り線によって区分けされている[11]。壺のように垂直面があると釉薬が垂れて混じり合ってしまうため、平皿が一般的。
ミーナーイー陶器（あるいはミナイ手陶器） ハフトランギー陶器とも呼ばれる mīnā’ī ware　　haftrangī ware http://www.metmuseum.org/collection/the-collection-online/search/460719	おもにイラン	12 世紀後半から 13 世紀前半まで	人物表現／多色	ミーナーイーとはペルシア語で「エナメル」を意味する言葉[12]。つまり、多色のエナメルで上絵が描かれた陶器を指す。ミナイ手陶器とも呼ばれ、この場合「手」は手法、型を意味するという[13]。成形した器に白またはターコイズ・ブルーの釉薬を施して、窯で 1 回目の焼成を行う。その後、高温で定着する色の顔料で彩画・着色し、その度に焼成する。最後に、低温で定着する金を焼き付ける[14]。なお、別名のハフトランギーは「七色」を意味するペルシア語[15]。

 http://www.metmuseum.org/collection/the-collection-online/search/451380				
ラージュヴァルディーナ陶器 lājvardīna ware "Bowl [Iran]" (34.151) In Heilbrunn Timeline of Art History . New York: The Metropolitan Museum of Art, 2000–. http://www.metmuseum.org/toah/works-of-art/34.151. (October 2006)	イランから中央アジアへ	13 世紀後半から	植物、動物、銘文（中国の影響あり）／多色	ミーナーイー陶器の流れを汲むが、金箔が使われているのが特徴。ラージュヴァルドとは貴石のラピス・ラズリ(青金石)を意味するペルシア語。イル・ハーン朝下イランで開発され、濃紺色やターコイズ・ブルー色を基調とし、赤、白、黒、金彩が加えられる[16]。

イズニク陶器 İznik ware Ceramic mosque lamp © Trustees of the British Museum http://www.britishmuseum.org/explore/online_tours/museum_and_exhibition/arabic_script/ceramic_mosque_lamp.aspx セリム２世の霊廟の彩釉タイル板 Panneau du mausolée de Selim II © 2004 RMN / Jean-Gilles Berizzi http://www.louvre.fr/jp/oeuvre-notices/セリム２世の霊廟の彩釉タイル板 http://cartelfr.louvre.fr/cartelfr/visite?srv=car_not_frame&idNotice=22716	イズニク （トルコ）	15-17 世紀	植物（花）／ 単色→多色	15 世紀頃より前述のブルー・アンド・ホワイトが生産され、その後青緑色（トルコ青）、緑、紫、黒と色彩の数を増やしてゆく。16 世紀半には、イズニク陶器最大の特徴である独特の赤色（トマト赤、サンゴ赤ないしアルメニア赤）が現れるが、これには鉄分を多く含む珪石の粉が使われた。サーズ（細長い葉）、ハターイー（羽毛状の花弁がザクロの実のように集まった架空の花）、カーネーション、チューリップ、バラ、スミレ、ヒヤシンス等の花の描写が特徴的[17]。

クバチ陶器 Kubachi ware http://www.metmuseum.org/collection/the-collection-online/search/445291 http://www.metmuseum.org/collection/the-collection-online/search/446928	イラン	16-17 世紀	人物、動物、植物文／単色ないし多色	ロシアのダゲスタン共和国クバチ村で発見されたことに因んで命名された。前述のブルー・アンド・ホワイトの流れをくむタイプと、青緑色と黒のタイプ、そして赤、黄、緑、コバルト・ブルーなど様々な色を使用した多彩との３つのタイプがある[18] http://www.metmuseum.org/collection/the-collection-online/search/451437

1　桝屋友子「ラスター彩陶器」『岩波イスラーム辞典』、桝屋友子『すぐわかるイスラームの美術』東京美術、2009 年、114-15 頁。
2　世界のタイル博物館編『世界の装飾タイル』青幻舎、2007 年、27 頁。
3　G. Marçais, “Fakhkhār”, *EI*², II, p.745.
4　鈴木博之ほか『ディテールがつくる風景』INAX 出版、1997 年、26 頁。
5　三杉隆敏『「元の染付」海を渡る 世界に拡がる焼物文化』農文協、2004 年、4-5 頁、桝屋友子「ブルー・アンド・ホワイト」『岩波イスラーム辞典』、桝屋友子『すぐわかるイスラームの美術』東京美術、2009 年、118 頁、G. Marçais, “Fakhkhār”, *EI*², II, p.745.。
6　阿部克彦「サリー陶器」『岩波イスラーム辞典』
7　阿部克彦「陶器」『岩波イスラーム辞典』、桝屋友子「陶器」『新イスラム事典』、桝屋友子『すぐわかるイスラームの美術』東京美術、2009 年、112-13 頁。
8　三杉隆敏『「元の染付」海を渡る 世界に拡がる焼物文化』農文協、2004 年、130 頁。
9　三杉隆敏『「元の染付」海を渡る 世界に拡がる焼物文化』農文協、2004 年、110-11 頁。
10　桝屋友子「ラカビー陶器」『岩波イスラーム辞典』
11　http://www.discoverislamicart.org/database_item.php?id=object;ISL;uk;Mus01;14;en
12　岡野 智彦、高橋 忠久『タイルの美Ⅱ　イスラーム編』TOTO 出版、1994、42 頁。
13　http://www.meccj.or.jp/mikasa_library/katarukai/17th/17th.html
14　岡野 智彦、高橋 忠久『タイルの美Ⅱ　イスラーム編』TOTO 出版、1994、42 頁、桝屋友子「ミーナーイー陶器」『岩波イスラーム辞典』。
15　岡野 智彦、高橋 忠久『タイルの美Ⅱ　イスラーム編』TOTO 出版、1994、62 頁。
16　桝屋友子「ラージュヴァルディーナ陶器」『岩波イスラーム辞典』、岡野 智彦、高橋 忠久『タイルの美Ⅱ　イスラーム編』TOTO 出版、1994、45-6 頁
17　桝屋友子「イズニク陶器」『岩波イスラーム辞典』、桝屋友子『すぐわかるイスラームの美術』東京美術、2009 年、85, 117 頁、岡野 智彦、高橋 忠久『タイルの美Ⅱ　イスラーム編』TOTO 出版、1994、128-30,146-49,154-55 頁、世界のタイル博物館編『世界の装飾タイル』青幻舎、2007 年、67 頁。
18　http://www.iranicaonline.org/articles/ceramics-xv、阿部克彦「クバチ陶器」『岩波イスラーム辞典』、桝屋友子「ブルー・アンド・ホワイト」『岩波イスラーム辞典』、岡野 智彦、高橋 忠久『タイルの美Ⅱ　イスラーム編』TOTO 出版、1994、73-4 頁

【 参 考 】　彩色料から得られる色

- 彩色料　→　得られる色
- 錫（スズ）　→　白色
- コバルト　→　青色、藍色
- 銅　→　緑色、青緑色（トルコ青）
- マンガン　→　茶色、なす紺（暗紫色）
- 鉄　→　赤色